

木俣 努^{*}

聖句

初めに言があつた。言は神と共にあつた。言は神であつた。この言は、初めに神と共にあつた。万物は言によつて成つた。成つたもので、言によらずに成つたものは何一つなかった。言の内に命があつた。命は人間を照らす光であつた。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった（ヨハネ福音書一章一節〜五節、新教同訳より）。

[†] 本稿は、二〇一〇年一〇月一五日、清泉堂にてチャペル礼拝で行つた奨励の原稿である。

^{*} KIMATA, Tsutomu 四国学院監事、元社会福祉法人イエス団豊島神愛館施設長
兼瞳保育所所長

奨励

ご存知のように、「言」は人と人とのコミュニケーションには欠かすことができません。同時に、神と人とのコミュニケーションにも「言」は欠くことができません。神は「言」をコミュニケーションの道具どころか、「言」が神ご自身であると宣言されました。しかし、神は一八節で「いまだかつて、神を見た者はいない」と言われました。確かに旧約時代においては、神は「私はあるという者だ」と言われましたが、誰にもその姿は現されませんでした。神の「言」にしても、「神の言」を直接聞くことができたのは、神と人との間を仲介する、預言者と言われるほんの一部の人に限られていました。したがって、旧約時代の人々は、見ることも、触ることも、「言」を聞くこともできない神を信ずることがなかなかできませんでした。

そこで神は、「初めからあったもの、わたしたちの聞いたもの、目で見たもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち『命の言』(イヨハネの手紙一章一節)。つまり、神を信じていることができるよう、そして世の救いのために、聞くことができ、見ることができ、触ることができる、「命の言」、すなわち救い主なる、主イエス・キリストを、この世に人として遣わされたのです。聖書は「言」について、「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」(ヨハネ黙示録一章四節)すなわち、過去、現在、未来に存在しておられる神、主イエス・キリストであると証しました。

さて、学生の皆さん、あなた方は、この四国学院大学において、学問の学びをしています。その学びは、当然のことながら「言」をもつての学びであります。この社会では今、ヴィジュアルの時代だとも言われています。しかし、そのヴィジュアルによる映画、「ドラマ、ドキュメンタリー等は、「言」で書かれた台本にしたがって作られています。また、製作者や監督は、「言」をもつて、俳優やスタッフに指示を出しています。ましてや大学は、もつとも「言」を大切に扱わねばならない現場なのです。皆さんは、大学における先生方の話される「言」による講義、板書される「言」、参考文献として読む学問書の「言」をおろそかに聞いたり、読んだり、話したりすることはできません。

私が乳幼児「豊島神愛館」の施設長をしているとき、実習に来る学生にあらかじめ福祉に関するレポートを、参考資

料を示して書いていただきました。そして実習の合間に演習を行いました。実習生の皆さんは、いろいろ福祉についての自分の考えを書いてくださいました。私は、書いてくださったレポートを丁寧に読ませていただきました。そして、自分の「言」で書かれている文章、その文章に書かれた「言」の意味、主旨を聞くことができました。また、参考資料をどのように読んで理解したか、参考資料をレポートにどう生かしたかを聞きました。実習生の皆さんは、どういう主旨でその「言」を用いたか、参考資料の主旨をどう理解したか、説明できないことがよくありました。つまり、「言」を日常茶飯事のこととして、その主旨も考えず、気軽に扱ったゆえでした。

多分参考文献を読むにあたっては、「そこに書かれた文章の行間をも読みなさい」と、先生方から教えられたことがあると思います。参考文献に書かれている文章だけではなく、その文章に使われた「言」の意味、主旨を考察することもある大切なことです。今日拝読した聖書の箇所についても、「言」がなにを意味しているかを読み取ることが、聖書を理解する重要な手掛かりになるのです。学問の府である大学に学ぶ皆さんは、「言」が神であることを心にとめ、講義を聞くにしても、レポートを書くにしても、ある課題を協議研究するにしても、「言」を一つの道具としてではなく、言自身が真理を指し示している、神を指し示していることを心に留めつつ、大切に用いていただきたいと願います。

「言」には愛があるのです。神が私たちに愛をもって、「言」である主イエス・キリストを私たちに遣わされたように、私たちも、隣りに愛ある「言」で接しましょう。間違っても、あなた方の隣りを傷つけるために用いることのないよう、心がけようではありませんか。「言」は使いようによっては、悪魔にもなる諸刃の剣でもあるのです。

祈り

主イエス・キリストの父なる神様、あなたは、「言」であられるあなたの独り子主イエス・キリストを私たちのところにお遣わしになりました。それ故私たちはその「言」に愛を感じることが出来ます。私たちは、あなたが設立されたこの四国学院大学において、「言」をもって学び、真理の探究をいたしております。願わくは、主イエスに習って何事

をするにも「言」を疎かに扱うことがないよう、私たちの心を清く整えてくださるようお導きください。
主の聖名によって祈ります。

アーメン